

# Siamese Inter-State Relations from a Regional Perspective: A Note on the Letters Exchanged between Siam and her Neighboring States in the First Reign of the Rattnakosin Period

by Junko KOIZUMI

According to a Thai archival record, during the several decades between the 1770s and the 1840s, approximately 190 letters were exchanged between Siam and other countries such as Vietnam, Burma, and China; and they were preserved at the royal store house (*holuang*) in the 1840s. Of these letters, over seventy were exchanged with Vietnam, a little more than forty with China, followed by almost forty with Burma, indicating that the Siamese court carried out an active exchange of letters with her neighboring states and China in the early Bangkok period. By taking the letters exchanged between Siam and Vietnam, and Burma in the first reign of the Rattanakosin period as example, this article examines institutional arrangements for inter-state relations that regulated these letter writings and exchanges, as well as the existence of broad networks of information reflected in those letters. By so doing, it addresses the question of the regional inter-state relations that encompassed both mainland Southeast Asia and China under which Siamese active inter-state relations were operated.

# ラタナコーシン朝一世王期シャムの対外関係

## ——広域地域像の検討にむけた予備的考察——

小泉順子

### I. はじめに

タイ国立図書館古文書部に所蔵される「*Ho Luang*」に保管される国書等文書目録〔以下「文書目録」と略記〕と題される文書は、18世紀末から19世紀初めにかけて約50年間に、シャムと諸国との間で交換された国書や種々の書簡類、約190通の一覧を記録する<sup>(1)</sup>。なかでもベトナム関係文書は72通を数えて最も多く、次いで中国関係文書42通、ビルマ関係文書39通が続き、さらにラーオ関係文書16通、カンボジア（クメール）関係文書13通、そして西洋（*farang*）関係文書5通などが列挙される。これらの往来文書は、中国、カンボジア、ベトナム、ラーオ、ビルマ、西洋の順に相手国別にリストアップされ、各文書について、その種類、発信元、宛先、発信年（月日）が記される。また、筆記に使用された雌黄・チョーク等の別も記され、数点の文書（写本）がまとめられて1帯の横折本等に取められる場合には、その旨も記される。

この「文書目録」の概要から、当時シャムと近隣諸国——とりわけベトナム、中国、ビルマ——との間で、活発な文書交換がなされていたことが確認できよう。またシャム側には、中国から、ベトナム、ラーオ、カンボジア、そしてビルマまで一連の国々との往来文書の一つのまとまりとみなす認識が存在し、ここでは「国書」（*phraratchasan*）<sup>(2)</sup>など、交わされた文書を、個別相手国を越えて横断的に分類する共通のカテゴリーが想定されていたこと、さらに西洋と

のやり取りも別扱いはされず、同目録に組み込まれるべく認識されていたこと、などが示唆される。

本稿は、この「文書目録」に列記されるようなラタナコーシン朝初期における対外関係関連文書を、主として文書の様式や交換・交渉をめぐる手順、運用方法などに着目しつつ、比較や総合という観点から再検討し、同時代人の視野に側してうかびあがる対外関係認識や広域地域像の再構成ともいべき課題に向けた予備的・試論的考察を示すことを目的とする。

ひるがえって既存の研究を省りみれば、ラタナコーシン朝初期におけるシャムの対外関係は、総じて、二国間関係を軸に検討されてきたということができよう。なかでも中国との関係については、アユタヤー朝崩壊後、シャムの復興にとりとりわけその重要性が指摘され、数多くの研究が重ねられてきた<sup>(3)</sup>。しかしその考察の中心はもっぱら交易の側面におかれ、文書のやりとりそのものに着目する研究はわずかである。数少ない貴重な研究は、基本的な文書作成・送付・翻訳等の手順を明らかにし、そこから朝貢をめぐる両国間の認識の相違と、両国関係の展開に果たした仲介者の役割を導きだしているが、検討の枠組みは、あくまでもシャム＝中国の二国間関係である<sup>(4)</sup>。しかし、シャムが対中国関係を如何に認識していたかという問題は、ビルマ、ベトナムなど近隣諸国に対する認識との相互関係性の中で比較検討されてこそ、より明確な位置づけを以て理解することが可能になるのではないだろうか。

他方、中国以外の対近隣諸国関係に関する研究は、管見の限り、主たる検討対象は、「プラテーサラート」(prathetsarat)と称されたいわゆる「朝貢国」との関係である。ここでは複数の「主権」が重層的な関係を結ぶ様が明らかにされながらも、バンコクを起点に描かれる限りにおいては、一政体論にとどまらざるを得ないという印象を否めない。またビルマやベトナムとの関係を取りあげる場合は、特定の治世の諸側面を説明する中で紹介するか、もしくは、アヌ王の「反乱」やカンボジアをめぐるベトナムとの戦争など、特定の事件をと

りあげて、二国間関係史の枠組の中でその原因を探り、展開を跡づけるという形で、双方の交渉・抗争過程を検討する研究が中心であろう<sup>(5)</sup>。

別言すれば、ラタナコーシン朝初期シャムの「対外」関係をめぐる研究は、シャム国家・政体の枠内における「朝貢国」との関係と、二国間関係を軸とした特定国との関係の検討に分断され、いわゆる「地域」への関心は乏しいといえるのではないか。こうした研究状況に鑑み、本稿では、特に「朝貢国」の外側に存在した周辺諸国との活発な文書往来を可能にした条件と、多国間の情報交換を通じて同時代人の眼にうつしだされる地域間関係の束やその構図を考えてみたい。ここでこのような課題の追求を試みる筆者の問題関心の先には、かつて検討した中国との朝貢関係を強く批判したモンクット王の布告に示される対外関係認識がある。ここでは中国との朝貢関係が、西洋との条約関係と、近隣諸国との朝貢関係との間におかれて議論されており、これらの諸関係を、相互連関的に、包括的に検討する必要性を指摘した<sup>(6)</sup>。本稿は、こうした19世紀中葉の対外関係認識の背後に培われてきた歴史的条件を探り、より長期的検討に向けた予備的作業と位置づけられる。

ただし上記「文書目録」に記載されている文書は200点近くにのぼり、また損失等により、現物との照合・確認は極めて困難な作業となっている。本稿では、一世王期におけるシャム＝ビルマ、シャム＝ベトナム関連文書を事例として取り上げて考察を加え、今後の課題・論点、方向性を探ることとしたい。この時期は、ビルマとの戦争やベトナムにおける新政権の成立など、近隣地域で変動が続くなか、新たに設立されたラタナコーシン王朝が対外関係の構築を模索した時期であり、両国ともにおびただしい数の文書が交わされた時でもあった。

## II. バンコク朝初期の対外関係文書

個別の文書を取り上げその内容を検討するに先立ち、前述した「文書目録」に記載される対外関係に関する文書の全体像を概観しておきたい<sup>(7)</sup>。

まず最も多数に上ったベトナム関連文書を見てみよう。「ベトナム」(ユアン yuan) の下に分類された文書は72通を数えたが、そのうち53通が「王の書」を意味するいわゆる「国書」(phraratchasan) であった。ちなみに、この「国書」は、清朝皇帝とシャム国王との間で交換された書簡を称する言葉としても使われており、国王・皇帝同士の往来書簡の総称であったと考えられる。

「国書」の内訳を発信者別にみれば、シャムから発信された「国書」は23通あり、みな「クルンタイの国書」(phraratchasan krungthai) として分類される。他方、ベトナムから発信された「国書」は30通を数えた。発信元別に「タンキア・アナムコック・チャオ・カンティ」3通、「ベトナム」27通に大別され、後者は嘉隆帝(22通)、明命帝(1通)、嘉隆帝御后(4通)から成っていた。

「国書」以外に「書簡」(nangsu) と称される文書14通も挙げられる。中央役人、もしくは地方権力同士の往来書簡で、タイ側の主たる発信者・受領者は、チャオプラーヤ・プラ克蘭(Chaophraya Phrakhleng 外務・財務を司る大臣)、ベトナム側は“Ong Lepo”と称される中央役人、およびサイゴン国主(chamuang)など地方権力であった<sup>(8)</sup>。

時期的には、1793年から1841年にわたる文書がリストアップされているが、特に1793年から1796年、1802年から1806年、および1809年から1817年に集中して文書が交換されていた様子である。

ベトナムに続いて多数の文書が交わされた中国はどうか。42通中、29通の「国書」が確認できる。内、シャム国王から中国皇帝への「国書」は16通、中国皇帝から発信された「国書」は11通であった。残り2通は年次不明の明命帝から

シャム国王への「国書」が、恐らく中国からの国書の写しと同じ横折本に収められていたという理由で混じったものだった。「国書」以外の13通は、役人間で交わされた「書簡」であった。そのうち、チャオプラヤー・ブラ克蘭と、「(広東) 総督巡撫」(chongtokmui) および「礼部大堂」(liputathang) との間で交わされた文書が6通確認される。また、中国人通事がチャオプラヤー・ブラ克蘭等に宛てた文書4通、イギリス軍と広東の総督巡撫の間で交わされた文書2通、中国人役人からイギリス女王に宛てた書簡1通も含まれる。後者7通はいずれも1842-3年の文書であり、アヘン戦争に関連して、シャムが種々の情報を入手していたことがうかがわれる。

時期的にみれば、「文書目録」中最も古い文書は1781-2年にシャムから送られた「国書」であった。以降、1840年代初めにいたるまで、1790年代末から1800年代半ば、そして1820年代後半と往来が減る時期はあるものの、それ以外は少なくとも2-3年に一度程度文書が交わされていたもようである。

以上ベトナムと中国は、シャムとは概ね(ベトナムの場合には、少なくとも1830年代初めまで)友好関係にあったのに対して、次に示すビルマの場合は、戦時状態が続いたため、交換された文書もそれを反映した特徴的ものになっている。

即ちビルマとの交換文書39通には、国王同士が交わすとされる「国書」(phraratchasan) は含まれない。確かにアヴァ王(Chao Angwa) から発信された文書2通が含まれるが、1通は「タイ国王」(krungthai) に、もう1通はプラヤー・カーンプリー(カーンチャナプリー) に宛てられ、いずれも「書状」(chotmai) と称される。その他「陳述」(khamhaikan) 等を除き、大半の29通が地方役人の間で交換された「書簡」であり、そのほとんどはカーンチャナプリーと、マルタバン、タヴォイとの間で交わされていた。また時期的には、1790年代半ばに送受された文書が30通を数えて大多数を占めるが、1780年代末、1800年代の文書も若干確認できる。総じてそのほとんどが一世王期の文書とい

うことになる。

この他にラーオ諸王国およびカンボジアとの交換文書がそれぞれ16通、13通リストアップされている。前者には、トンブリー朝期に「ラーオ・ラーンチャー」と「クルンタイ」との間に交換された「国書」4通と、大臣レベルで交換された「スツパアクソン」(suppha-akson「美しき文字」)と称される文書2通<sup>9)</sup>、そしてチェンルン、チェンマイなどと交換された「書簡」5通が含まれる。他方、カンボジア関係の文書に関しては、少なくとも8通はシャムの役人が発信した書簡であり、また日付が付されているものは、1815年前後に集中している点が特徴的である。

加えて、「文書目録」の末尾には1833年にシャムと修好通商条約を締結したアメリカの使節エドモンド・ロバーツ関連の文書等、西洋諸国と交換された文書5通も含まれていた。

それでは、こうした文書の交換はどのような形でなされ、またいかなる情報を含んでいたのか。次節以降、一世王期にベトナムとビルマと交わされた文書を事例として取り上げて、その送受と内容を考察する。

### Ⅲ. 一世王期対ベトナム関係文書

「文書目録」によれば、ラタナコーシン朝初期におけるシャムとベトナムの交渉は、ほとんどが国王同士が交わした“phraratchasan”と称される「国書」のやりとりであった。特に一世王期に限れば、24通の交換文書中19通が「国書」であり、内15通がベトナム国王からの、4通はシャム国王から発信された「国書」であった。すなわち、ベトナム側の積極的発信が顕著であったことが確認できる。また18世紀から19世紀初め、ベトナムでは諸勢力間で政治的覇権をめぐる抗争が続いていた事態を反映して、1790年代半ばには、西山阮氏政権との間において、シャムから2通、ベトナムから2通、合計4通の「国書」の往来

が確認されるが<sup>(10)</sup>、1802年阮福暎が嘉隆帝として即位した後は、嘉隆帝と一世王との間で「国書」が、また双方の役人の間で「書簡」が、交換されている。一世王期に交換された文書の大半にあたる18通はこの嘉隆帝即位後であり、とりわけ1802年から1806年の数年間に集中する。「国書」の交換に周期性は認められず、双方の政治的状況に応じて交わされた様子である。なお、ベトナムから送られた「国書」はベトナム（ユアン）文字で書かれ、シャムに到着後、シャム側の役人によってタイ語に訳されたことが記される<sup>(11)</sup>。

それでは現存する文書から具体的なやりとりの様相を確認したい。1803年7月、嘉隆帝から、「朝貢品」とともに「国書」がシャム国王のもとに届けられた<sup>(12)</sup>。これが嘉隆帝期最初の両者の接触である。「国書」には、前年、トンキンを攻撃した後、フエを掌握し、祖先崇拜の儀礼を行い、反逆した役人を死罪に処したことが記され、また既にヴィエンチャンに「国書」を送り、その旨をシャムに知らせよう伝えたことが再確認されていた。さらに抗争の最中、シャム国王から、硝石、鉄、錫、蘇木などを提供されたことに対する謝意が表され、返礼として、正宮には金の延棒10本、銀の延棒100本、なぎなた1本、蜜蝋6ハーブ、砂糖60ハーブ、色とりどりの絹織物250巻、前宮には金の延棒5本、銀の延棒50本、蜜蝋4ハーブ、砂糖40ハーブ、色とりどりの絹織物150巻を献上する旨が記されていた。加えて、ビルマのシャム攻撃情勢に対する懸念も示され、ビルマ軍撤退の知らせに対する喜びの意も示されていた。

また、「国書」と「朝貢品」を捧持した使節により、このたび使節の派遣と国政報告が遅れたことに関する陳述がなされ、添付されている<sup>(13)</sup>。それによれば、「安南国王」（phrachao anamkok）は、フエに入った後、1802年末から1803年初めに、二人の高官に命じて、2名のシャム国王に献上する「朝貢品」を積んだ船1隻と護衛船10隻を調達させた。サイゴンでさらに砂糖と蜜蝋を積み、クワーンナム（Kwangnam）<sup>(14)</sup>に到達したところ、嵐に遭遇し、朝貢船、護衛船ともに座礁し、多数の人命が失われた。一命を取り留めた役人2名と



平民は、ともにフエに戻った。翌年王は〔使節に〕「朝貢品」を調達するよう命じた。波風の強い時期であったので、陸路サイゴンまで行くよう指示されたが、丁度、マカオから「安南国王」に謁見する船がフエに来航し、サイゴンへ交易に赴くとのことであったので、国王はその船で〔使節を〕サイゴンまで渡航させた。サイゴンで船を調達して「朝貢品」を捧げ持ち、ここに献上したということであった。3隻の船でシャムに到着した一行は、高官3名、下級役人12名、ベトナム人ブライ（平民）58名、計73名であった<sup>(15)</sup>。

その後も1807年に至るまで、ほぼ毎年「国書」と「朝貢品」が交換されている。例えば、1804年4月にベトナム国王が派遣した使節は、同年2月にシャムから贈られた品々に対する返礼として、金塊5個、銀塊50個、色とりどりの絹織物100反、白布100反を携えていた。加えて、前年11月に、シャムの前宮が亡くなったという知らせを受け、前宮の恩徳に対して蜜蠟5ハープ、白布100反、種々の砂糖あわせて40ハープも添えられた<sup>(16)</sup>。

これに対する返信として、1804年8月16日付シャム国王の「国書」には、シャムがビルマと交戦状態にあることが説明され、チェンマイ、ランパーン、ナーン軍がチェンセーンを攻撃し、再びビルマとの間に緊張が高まっている状況が記された。そして、シャムから攻撃を仕掛ける用意があることを知らせ、とりわけ沿海のメルギー、タヴォイ、マルタバン、ラングーンを撃てば勝利の可能性が高まるとし、援軍として完全装備した軍艦200-300隻を、ペナン、クダー、プーケット方面に派遣するよう要請した<sup>(17)</sup>。

「国書」に添えられたベトナム国王に対する贈物には、火打石銃など銃3丁、金の刺繍入り外国製毛布1枚、大小合わせて53個の宝石、イヤリング2個、指輪1個などが含まれていた<sup>(18)</sup>。

ベトナムがこの派兵要請に応じたか否か、確認できる記録をみいだせないが、その後も両者の間では、チェンゲンがテーンから100家族にのぼる人々を連行していったことをめぐり摩擦が生じるものの、「国書」の送受は続いた<sup>(19)</sup>。

1809年、ベトナムから3通の「国書」が届いた。内2通は嘉隆帝からシャム国王（一世王）に宛てたもので、残りの1通は、嘉隆帝御后から親族に宛てられていた。同年4月1日、3通ともに王宮のプラモンティアンタム宮殿において、タイ側の役人によりタイ語に訳された<sup>(20)</sup>。

嘉隆帝からシャム国王に宛てた2通の「国書」のうち1通は、シャム国王の繁栄を慶び、正使・副使を派遣し、「国書」とともに、高級香木2チャン[2.4kg]、良質な楠3チャン[3.6kg]、種々の絹織物あわせて絹織物400反、黒布100反を献上するという内容であった。もう1通は、ベトナム周辺海域において、ベトナム人海賊と中国人海賊との衝突が起き、ベトナムと中国双方が派兵し、多くの死傷者と逮捕者をだした事件を知らせ、中国側の首謀者の一人 Chin Tao O とその一味がシャム領域内に逃亡し悪事を企てる恐れがあることに注意を促す旨が記されていた。

これに対するシャム国王（二世王）の「国書」は1809年10月に送られた<sup>(21)</sup>。その主旨は、一世王の崩御と二世王の即位を知らせ、ベトナム国王に対する新国王の修好の意を伝えるというものであった。一世王御逝去の様子が詳述された後、ターク・シン王の息子[Chao Fa Krommakhun Kasatranuchit]とその一味による反逆事件と処刑の様子が報告された。そして次の第五月に一世王の火葬儀を行う旨を伝え、最後にプラヤー・シースリヤパーを正使とし、プラ・ラーチャセナーを副使に、ルアン・チットサネーハーを三使に、またクン・シーセナーとムーン・ハーンチャラーライの2名を通訳に任命し、ここにタイ文字1通、中国文字1通、そしてベトナム文字1通、計3通の「国書」を捧持させることが記された。

この「国書」の冒頭には、これがオレンジ色の紙にインクで記され、プラヤー・コーサー、プラヤー・ウタイタム、プラヤー・ティップコーサー、プラ・アーラック、プラ・アパイピピット、クン・サーラプラスート、クン・マハーシット、プラ・ラーチャモントリーユアンが一同に会し、モンティアンタム宮殿に

て、タイ文字の「国書」と、中国文字の勘合表文 (phraratchasan kamhap) にそれぞれラクダ印 (tra loto) 1つを捺印し、さらにガルダ印 (tra khrut) を2つを以て封印したとの説明が付される。それから丸い木の容器に入れ、赤い絹の房がついた金糸銀糸を織りこんだ絹製の袋に納めたという。

また末尾においても、ベトナムに送る「国書」の慣行に従い、「国書」を記した後、暦年用ラクダの印を押し、六龍の印 (tra mangkonhok), 象の印 (tra aiyaraphot) を以て円板型のラックで竹筒状の容器の口と袋の底と口に封印し、ラクダの印とガルダの印で中国文字とベトナム文字各一枚にも捺印して封じた後、金龍の模様入りの丸い木の容器に入れ、赤い絹の房がついた金糸銀糸織りの絹袋に入れたことが再び記される。

ちなみに、これ以前の記録では、ベトナムと交わされた「国書」においてこのような捺印や容器等に関する記述はみあたらない。そのことが直ちに捺印等の欠如を意味するとは言えないが、少なくとも1809年を機に、シヤム側における関心が高まったことは指摘できよう。

中国へ送られた国書との類似性を強く感じさせるこのような捺印や容器は、その後、例えば1810年代にシヤムからベトナムに送られた「国書」においても確認することができる<sup>(22)</sup>。ただしいずれのケースでも、中国への進貢の際に携えた「спанナバット」(suphannabat) と称される「金葉表文」は、ベトナムとのやりとりにおいては確認できない。この点から、ベトナムとの関係が、対中国関係と重なる要素を有しつつも、ある面では差異化されていたことが示唆されるように思われる<sup>(23)</sup>。

他方、近隣国からシヤムへの朝貢に関連しては、Kobkua [1988: 57] や Wilson [1993] が、『ラタナコーシン朝一世王期王朝年代記』に依拠して、阮福暎が、王位をめぐる闘争期間中、頻繁に一世王に金樹・銀樹を送付したと指摘する。しかしながら、前述の「文書目録」とタイ国立図書館所蔵一世王期行政文書 (chotmai het) カタログを照合しつつ、現存する文書に遡って確認を試

みても、管見の限りでは、金樹・銀樹の送付記録を見出すことはできなかった。

周知の通りこの一世王期王朝年代記は、チャオブラヤー・ティパーコーラウォンが、五世王チュラーロンコーンの命を受けて、1869年に編纂した。「前文」には、作成にあたり資料を渉猟したところ、特に港務局（Krommatha）には中国とベトナムに関する文書が多数保管されていたこと、その理由として「ユアン側のアンナム国王」が属国としてバンコクに金樹・銀樹を送付したことが記されており、ティパーコーラウォンの認識において、阮福暎のシャムへの服属が、特筆されるべき意味をもったことが示唆されている<sup>(24)</sup>。だが、上記の史料状況は、一方で、いわゆる「国書」や「書簡」という形式をとらない記録が他所に存在した可能性が残されるものの、ティパーコーラウォンの記述に再考の余地があることも示していよう。

最後に、国書や書簡のやりとりを通じてベトナムと交換された情報が、華南からビルマに至る陸域・海域をまたいだ広範な地域をカバーし、両者の交渉・接触到に複数の主体とチャンネルが存在していた様子もうかがえることを改めて確認しておきたい。1790年代半ば、西山阮氏政権とのあいだで交わされた「国書」においては、阮福暎の動向とともに、ヴィエンチャンによるプアン攻撃について説明され、そこではベトナムの状況をヴィエンチャン経由で把握していたことが示唆される<sup>(25)</sup>。他方、1804年12月半ば、前宮の葬儀に際して、ベトナムが白布などを届けた機会に、プラ克蘭から Ong Lepo に送られた書簡には、新前宮がベトナム国王との修好を願い、錫塊234個を献上することが記され、交易のためアモイに赴いた前宮のジャンク船に便宜を図って欲しい旨をベトナム国王に伝えるよう依頼している<sup>(26)</sup>。同じ年、ベトナムに対して海軍の援軍を要請した際には、ペナンにおけるイギリスの存在にも言及し、ベトナムが派兵する場合は、イギリスに使節を派遣して知らせ衝突を防ぐべく配慮する旨も伝えられていた<sup>(27)</sup>。

## IV. 一世王期対ビルマ関係文書

この時期比較的良好な関係が保たれたベトナムや中国と対照的に、1767年にアユタヤー朝を終焉に至らしめたビルマは、その後も19世紀初頭に至るまでシャム攻撃を繰り返した。1780年代半ばには、タラーンからマレー半島にかけて大規模な攻撃を仕掛け、三仏峠、ラーンナーにも攻め入った。1790年代、1800年代においても攻撃は続き、シャムは、ビルマとは戦時状態が続いているという認識を終始変えることはなかった。

しかし、であるからといって両者に接触や交渉がなかったわけではない。確かにシャム側は一貫してビルマに対する不信の念を表明していたが、その中で、マルタバンとカンチャナブリーを中心に、地方権力間でしばしば「書簡」(nangsu)が交換された。そしてその内容は、地方権力からアヴァ、バンコク双方の大臣へ、そして必要に応じて国王にも伝えられ、それぞれ大臣や国王の見解が、再びマルタバン、カンチャナブリーの地方権力を介して、相手方の相応の中央役人や国王に伝えられた。

再び上記「文書目録」によれば、ラタナコーシン朝初期のビルマ関係文書としては、1788年(小暦1149年)にビルマ軍司令官へシャム軍司令官から送られた「書状」(chotmai)が最も古い。タイ国立図書館所蔵文書(chotmai het)カタログ中に、該当すると思われる文書は見いだせなかった。1792年初めにタヴォイ国主から、ビルマの下より離脱しシャム国王に服属を希望する旨を「金の板」(phaen thong)に刻んだ書簡が、金樹・銀樹等の朝貢品とともに届いたが、管見の限り、これが現存する文書では最も古い<sup>(28)</sup>。そしてシャムとビルマの間で武力衝突が生じた1790年代初めから半ばにかけて、特にカンチャナブリーとマルタバンの間で集中的に文書が交換されたことがうかがわれ、その後は1802年頃、1808年、1813年にやりとりが確認されるにとどまる<sup>(29)</sup>。

具体的な例をみてみよう。書簡の往復が集中した1790年代半ば、シャムによるタヴォイ攻撃を契機に再び軍事的対立が生じる中、マルタバン国主が、修好を願うビルマ国王の意思を示した書簡をカーンチャナブリー国主へ送った<sup>(30)</sup>。カーンチャナブリー国主は、これをバンコクのアックラマハーセナーボーディー（宰相）に伝え、その内容をアックラマハーセナーボーディーと大臣で協議し、再びアックラマハーセナーボーディーを介して、マルタバン国主に対する返答が、カーンチャナブリー国主に指示された。その内容は、今回送付された文書は、マルタバン国主に命じられた使節が携えてきた書簡であって、正規の使節が捧げ持ちきたる「国書」ではないことを指摘して、修好を要請する正規の文書として扱えないことを伝えるものであった。また陰謀の可能性も疑い、交渉するのであれば、国王・大臣が友好関係を結ぶ方策を協議した上、ビルマ人役人を正規の使節として任命し、かつてビルマに連行したタイ人高官か下級役人3-4名とともに、相応しい証人として僧侶を随行させるよう求めた。

このように、まずビルマ側が国書を携えた正規の使節を派遣することが、正式な修好に向けた交渉開始の条件であるという見解は、シャム側から繰り返し表明されたが、並行して地方権力間では、書簡の交換が継続され、贈物の送受を伴うこともあった。1795年初めにはカーンチャナブリー国主からマルタバン国主へ、中国風模様の緑と赤の絹布、金糸銀糸の絹布が書簡とともに贈られている<sup>(31)</sup>。続いて4月、バンコクのアックラマハーセナーボーディからマルタバン国主に対する返信が送られた。改めて今回の書簡がマルタバン国主の書簡に過ぎず、捧持した使節もアヴァ国王から任命された正使・副使・三使ではなく、「国書」も、アヴァの大臣からバンコクの大に宛てたスッパアクソンなる書簡も携えていないのは慣行に反すると指摘し、マルタバンからの使節は国王に閲見させずに帰還させる旨が伝えられた。そしてもし修好を希望するならば、国書と大臣の書を携えた正使・副使・三使の派遣を求めた。と同時に、マ

ルタバノ国主から贈られた織物や箱に対する返礼として、カーンチャナブリー国主から、赤の絹布1枚、ベンチャロン焼の皿と碗各10個が、マルタバノ国主に贈られている<sup>(32)</sup>。

一連の過程から、戦時状態であるにもかかわらず、あるいはそうであるがゆえに、両国の関係交渉は、一方では一貫して「地方の事柄」として処理されつつ、他方では「地方の事柄」を中央が吸い上げるチャネルも用意され、両者は選択的に組み合わせられつつ、王権相互の距離と格式を維持しながら事態の処理を図ろうとする様子が見えかわれる。そして、例えば書簡中に見いだされる「慣行に従い、国書を著し、金の貝葉に記入する」、「大臣が協議して書簡を作成し、袋に納め、ラックで封印する」といった表現や、かつてビルマに連れ去られたタイの役人や僧侶も含む使節の派遣をめぐる交渉が繰り返される様相<sup>(33)</sup>、背後に特定の文書・使節の格式と運用様式が想提されていたことが示唆される。また地方を介した間接的な交渉と並行して境界域の地方権力間では書簡や絹織物など贈物が交換され、これら複数のチャネルが確保されることにより、地方と中央がそれぞれに現実的な対応を模索したようすもみてとれる。

さて、関連して、ここで留意しておきたい点は、こうした書簡の送授にかかわる「慣行」が、シャムとビルマに留まらず、より広い地域の文脈に位置づけられ、共有されていたことが見えかわれる点である。上記「慣行に従い著すべき国書」を指摘したタヴォイのチャオムアン等の文書は、続いて、「中国と同様に慣行を損うべからず」と述べていた<sup>(34)</sup>。実際、この時代、ビルマとシャムとの間で交換された他の文書においても中国について言及があり、隣国関係の先・延長上にその存在が意識され、1つの権威の源たる認識が共有されていたこともうかがわれる。

例えば、1793年にビルマから届いた文書は、近隣諸国との修好を説明する中で、仏教の地スリランカとの強い関係を示すとともに、中国が「朝貢品」とともに皇帝の娘3人をビルマに献上し、友好関係を築いたことを記している<sup>(35)</sup>。

ちなみに、この3人の王女とは、1790年にビルマが乾隆帝80歳の慶賀に当たり請封使節を北京に送るに先立ち、清朝から派遣された使節により献上されたという記録がビルマ側に残るとされるが、これは清朝側の記録とは一致せず、ビルマが派遣したという請封使節もバーモが派遣した偽使節であったということが、後の研究により指摘されている<sup>(36)</sup>。

そして同時代のシャムもまた、この中国からの3人の王女献上が事実ではなかったことを、北京経由で把握していた様子である。1793年9月10日にカーンチャナブリー国主からマルタバン・タヴォイ国主に送られた書簡には、この一件について、次のように記述される。

中国皇帝がビルマ（アヴァ）国王に3人の王女を下賜した件について、中国に修好に赴いたシャムの正使、副使、三使は、ビルマの使節ピアンキーイドン、スリインタクコー、インタクコーに会見し、様々なことについて話し、理解している。もうこの件は言及することなかれ。他国が知るところとなれば、ビルマを嘲笑し、辱めるであろう<sup>(37)</sup>。

すなわち、シャムの朝貢使節が北京でビルマの使節と邂逅し、この件に関して情報を確認したことが示唆されている。だが、ビルマ側は引き続き、この3人の王女について言及し続ける。1795年1月にカーンチャナブリーに届いたマルタバン国主の書簡も、自ら下賜した3人の王女をビルマ国王が大切に養っているということを耳にした中国皇帝が、大変慶び、高位の役人を任命し、ビルマに遣わせ国王に会見させたと述べている<sup>(38)</sup>。さらに、1797年7月には、ビルマ国王が白象を得たとの知らせが、マルタバン国主からシャムの大臣と軍司令官に送られた。そこでも清朝皇帝が慈悲を以て王女3人と朝貢品を届け、ビルマ国王と修好を結んだことが記され、さらにはイギリス領インドも多くの朝貢品を届け、スリランカから仏歯を獲得すべく便宜を図る意を示したとも記さ



れた<sup>(39)</sup>。また、1802年11月に至っても、ウパコーンなるビルマの役人からチャオプラヤー・マハーヨーターラーチャシーピチャイナロンに宛てられた書簡においても、中国皇帝は3人の娘と「朝貢品」を届けたと述べられ、ヴェサーリー国は4人の娘と7種類の「朝貢品」を送って修好を図り、さらに「銀山」王も2名の娘と7種の「朝貢品」を献上して服属を願ったが、シャムは、これらの国々とは異なり友好を図ろうとしないと非難している<sup>(40)</sup>。

こうした直接中国からの使節や方物の贈呈のみならず、地方権力間で絹織物を贈る慣行などにも中国との朝貢関係との類似性が感じられる。また次にみる「金の板」も、シャムやビルマが中国に朝貢する際献上した金葉表文を髣髴させる興味深い事例である。

1808年、パヤー・ピムサーンに率られた14名から成る使節がビルマを訪問した。一行はチェンマイ王から派遣されたと述べ、ビルマ国王（Chao Angwa）に献上する「金の板」（phaen thong）に刻まれた「王の書」（ratchasan）、および4頭の象、そして「朝貢品」（bannakan）11箱を携えていた<sup>(41)</sup>。事情を尋ねると、前宮が亡くなりシャムが混乱に陥り、チェンマイと周辺57国にも混乱が波及したため、これまでの慣行を改め、ビルマに服属を希望するとのことであった。しかしながら、かつて反旗を翻した経緯があったチェンマイに対して不信の念を抱いていたビルマは、この一行を留め置き、チェンマイに使者を送り、事実確認をした。するとチェンマイの派遣した使節ではないことが発覚した。そこでビルマはこの一行を、チェンマイがビルマに送った使節だと偽らせて、丁度修好をめぐりタイ側と交渉中であったマルタバンから、カーンチャナブリー、ラーチャブリーを経て、シャムに帰還させることとした。帰還の途中、シャム側もカーンチャナブリーとラーチャブリーにおいて役人が審問し、これはチェンマイ王がビルマに派遣した使節ではなく、チェンマイに服属を希望したセーンウィーが、ビルマ軍に遭遇してとがめられることを恐れ、チェンマイからビルマに派遣された使節であると偽ったことが判明した<sup>(42)</sup>。結局、

シャムは使節をチェンマイに送還し、棒持していた「金の板」と品々は、正当なる持ち主が存在するという理由を以てビルマに返却されることとなった。

交渉の内容も興味深いだが、ここでは「金の板」が、忠誠の意を示す重要なシンボルとなっていたことに着目したい。形状は巻物状で、重さ6パーツ・1サルン・1フアン [約96グラム]、長さ1ソーク・8ニウ [66cm]、幅4ニウ [8cm] で、7行の文字が刻まれ、裏面に捺印があったと記される。鳳凰印で封印された赤の袋に入れられた赤い小箱1つ、重さ57パーツの銀製小箱1つ、重さ59パーツの金製小箱1つと絹の袋が添えられていた。事件の経緯から、この「金の板」は、途中遭遇したビルマ軍に対して、特に「王の書」を携えた使節であることを示すためにわざわざ調べられていた様子がうかがわれる。

加えて使節は、金・銀水碗各2つ、金・銀足つき盆各2つ、金・銀水瓶各1つ、金・銀タンツボ各1、金・銀小盒各1つの他、金糸・銀糸と7色の絹糸を織りあわせた布14種類、7色織の絹布14種類などを携えていた。

他方、パヤー・ピムサーン一行をシャムまで連行したビルマの使節とマルタバン国主に対してラーチャブリー国主から贈られた品々には、赤の絹布、金糸縞柄の上着、中国模様の上着、格子模様の絹布などが含まれており、織物に代表される贈物の重要性も改めて示唆される。

またこのケースにおいても、対等とみなされる役人同士が文書を交わしている様が確認される。すなわちバンコクのアックラマハーセナーティボディの書簡はビルマのセナーボディに宛てられ、双方の国王の言葉は、この大臣レベルの書簡に引用されて伝えられた。また地方権力同士、カーンチャナブリーとラーチャブリーの国主と、マルタバンの国主とが書簡を交わしている。

さて、セーンウィーの使節が携えていた「金の板」(phaen thong)の具体的な形状は不明であるものの、その記述のされ方は、いずれも「スパンナバット」(suphannabat)と称されたシャムから中国皇帝に送られた「金葉表文」や、シャム国王が自らに服属する「朝貢国」の王に下賜していた「金の板」を想起させ

る。

シャム国王から中国皇帝に送られた金葉表文は、方形の薄い金片で、大きさは14cm×25cm前後、重さは75グラムから110グラムほどであった。ここに、中国皇帝との修好を図るべく、国王が正使、副使、三使、通事等を任命し、慣行に従い国書と朝貢品を捧持させ、進貢に赴かせる旨が、白装束に身を包んだ右筆（Phra Alak）によって刻まれた。右筆はこれを巻いて金の箱に納め、綿を詰めてから、金糸・銀糸を織り込んだ錦の袋に入れた後、その口を絹紐で縛った。それから安息香を混ぜたラックを以て紐の結び目を六龍の印とガルダ印で封じた。これを螺鈿の台付き容器に納め、さらに緑の絹製縁飾りがついた黄色の絹袋に入れ、再びラックを以て六龍印とガルダ印で封印した<sup>(43)</sup>。その上に螺鈿のお盆に納め、黄色の絹袋にいれて捺印した<sup>(44)</sup>。

ビルマとラオスも中国に金葉表文を送ることが規定されており、中国を中心とする権威秩序の文脈におけるその象徴性について共通理解が存在したと推察される<sup>(45)</sup>。ただし、19世紀半ば、「金の板」は、シャムと条約を締結したナポレオン三世やヴィクトリア女王にも贈られる一方で<sup>(46)</sup>、シャム国王が、シャムに服属する「王」（chao）を叙任する際に、その称号を刻み下賜したのも「スパンナバット」と称された「金の板」であり、その多義性にも留意すべきであろう。

例えば一世王期にシャム国王により「スパンナバット」を以て叙任された「王」の例として、カンボジア、スワンナプーム、チェンマイ等が確認され、叙任に際して手の込んだ儀礼がとり行われた<sup>(47)</sup>。例えば、ヴィエンチャン王インタウォンの場合、幅3ニウ [6cm]、長さ16ニウ [32cm]、重さ2バーツ [30g]の金片に新たに賜った称号が5行にわたり刻まれた。金片は巻かれて金の小箱に納められた。それをさらに銀の箱、そして象牙の箱に納めてから、絹布の袋に入れ、袋の口をプラ・シープーリパリーチャーティラートの印で封じた。それから漆器のお盆に入れて絹の袋に包み、プラ・シープーリの印2つを押した。

シャムとその近隣との対外関係を検討する際、周辺の「朝貢国」(prathetsarat)の存在と、忠誠(服属)表明のシンボルとしてシャム国王に送られた金樹・銀樹が強調されてきたが、上記事例からは、あわせて多様な「スバンナバット」の流通や意味づけを検討する必要性が提起されるのではなからうか。

## V. おわりに

1840年代初頭に作成された対外関係に関する文書リストを糸口に、ラタナコーシン朝初期、とりわけ一世王期におけるシャムとベトナムおよびビルマとの交渉の一端を、文書交換の手順や運用の側面に着目しつつ考察してきた。最後に両ケースの比較と総合から導かれる論点と今後の課題を整理したい。

まずこの時期、シャムが、中国のみならず、ベトナム、ビルマと活発な文書の交換を行っていたことが改めて確認される。また交換された文書は、特定の発信元に対して特定の送信先が対応する形をとっていた。それぞれ国内の官僚制度に依拠した位階序列における上下関係を背景として相互に対等関係におかれるとみなされる同士が、その位階の位置づけに応じて、文書を交換し、文書はその権威の格式に従って「国書」、「書簡」と大別されていた。

国王・皇帝同士の往来書簡は相手国を問わず、共通して「プララーチャサーン」(国書)と称された。「国書」は、しかるべき役人を正使・副使等にたてて、「朝貢品」を携えて、相手方に届けられた。このような手続きを以て「国書」の交換がなされるということは、両国が友好関係にある証左であった。ラタナコーシン朝一世王期には、ベトナム国王、中国皇帝と「国書」が交換されたが、前者に対しては、「金葉表文」の送付がないなど、「国書」を交換する関係におかれる国の間において、差異も認められた<sup>(48)</sup>。また、「国書」交換に付随してそれぞれ対等とみなされる役人間では「書簡」が交わされた。

他方、戦時状態が継続していたビルマに対し、シャムは、正式な使節をたて

て、「国書」の送付を以て友好関係を回復するよう繰り返し要求したが、実現しなかった。しかし代わりに、地方権力間で盛んな「書簡」の往来があり、その内容は双方の中央役人に報告され、必要に応じて大臣間においても文書が交わされた。また「書簡」の授受に伴い、地方権力間で、絹織物などの贈物も交換された。

すなわち、それぞれの国内における権威のヒエラルキー、官僚体制を前提にして、発信者の格式に応じた文書のカテゴリーとその体系が一方で存在し、他方で格式が同等の者同士をつなぐ複数のチャンネルが、関係の濃淡を反映しつつ、格式秩序を維持すべく一定のルールに則って運用され、対外関係を構成した。

こうした文書の交換を通じてやりとりされた情報は、当該二国に直接関わる範囲を超える広がりを持っていた。例えば、ベトナムと交換された文書の中で、ビルマ情勢やアモイ船、ヴィエンチャンの状況が言及され、ビルマとのやりとりでは、中国との朝貢関係やスリランカ、チェントウンについても言及されていた。そうした状況から、シャム、ビルマ、ベトナム、中国との関係は、相互に連動しあっていたようすもうかがわれる。

他方、文書の様式や交換にともなう手続きにおいて、中国との関係が、共通の参照枠を提供していた可能性も示唆される。文書運用の作法と情報交換の背後には、広域の交易関係や、中国を基点とする朝貢関係が重層的に存在していた構図を想定することもできるのではなかろうか<sup>(49)</sup>。先にシャムの使節が、北京でビルマの使節と邂逅し、そこでビルマ国王が中国皇帝の王女3人を得たか否か、情報の真偽を確認したことを指摘した。そのことに関連して、1790年、乾隆帝の80歳の慶賀祝典の折、遅れて到着したシャムの使節が、メルギー、マルタバン、タヴォイをシャムへ返還させるべくビルマに圧力をかけるよう中国皇帝に依頼し、それを契機に、皇帝は、北京宮廷において、シャムの使節がビルマの使節と顔をあわせぬよう配慮したが、ビルマが朝貢する予定となっていた1809年には、シャムの朝貢を免除したにも拘わらずシャムは使節を送ったと

いう Suebsaeng [1971: 276-277] が指摘する事情は、中国への進貢が持った意味を考える上で興味深い。中国側の記録には、シャムの使節が北京に進貢した際、儀礼の場などで、しばしばビルマ、朝鮮、琉球、安南などの使節と同席する機会があったことが記されており、進貢が、中国および近隣地域に関する情報収集や、周辺国に対して自らに有利な措置を引き出す交渉の機会でもあったことも示唆される。かつてターク・シンがアユタヤー朝王家の末裔たる王子を擁するハーティエンの鄭氏と王権の正統性を争い、清朝から冊封という形で認証を得ようと対中交渉を展開したことを想起すれば、この時代、シャムのみならずこの地域の王権は、清朝からの認証をその正統性の重要な根拠とし、それが国内的のみならず、対近隣諸国という文脈においても意味を持っていたといえる<sup>(50)</sup>。「金の板」の送受や、ビルマが3人の王女のエピソード繰り返し言及したこと、シャムからベトナムに送られる「国書」が1809年以降中国的表現を明確にするかにみえる現象も、対外関係を考える上でこのような権威の文脈に、より注意を払う必要性を提起しているように思われる。

中国の文脈に改めて注意を払い、それを地域の動態と相互連動的に考えることになるが、このことから、シャムとベトナム、あるいはシャムとビルマとの文書交換・交渉を、中国を軸とする地域間関係という視座から再構成してみるという課題が導かれる。これまでシャムの積極的な進貢は、もっぱら交易の利という観点から説明されてきたが、対近隣諸国外交という視点から見直したとき、どのような意味を持ち、いかに運用・活用されてきたのかという点を、清朝が広域地域情報の集積・還流のポンプ的役割を果たしていたという視点から、ベトナムやビルマなどの進貢や、シャムとこれらの国々との関係と連動させて、検討するという課題も浮かび上がる。

ひるがえって、冒頭で紹介した「文書目録」に戻れば、この目録がなぜこの時期に作成されたのかという点も、広域地域の文脈から、改めて考えてみる必要があるのではないかと思われる。この「文書目録」は1838年次の文書

に分類されているが、目録に掲載される最も新しい文書の作成年が1840年代初めであることから、実際には1840年代初頭に作成されたものと思われる。この時期は、清朝による朝貢規程の変更やアヘン戦争等対外関係における重要な事件が生じた。こうした変動を背景に、これまでの対外関係に関する記録を整理する必要性や動機が生じたのではないかと推察される。文書記録と地域動態は連動している。

最後に、「マンダラ」、「銀河政体」について一言触れて本稿を閉じたい。これらの分析概念は、19世紀半ば以降、シャムがイギリスをはじめとする西洋諸国と条約を締結し、いわゆる国際法に基づく国際関係に包摂されていく過程を検討する際、西洋との条約関係に代替される以前のシャムの「対外関係」を表現するモデルとして理解されるとしたら、それはやや誤解を招く恐れがあるのではないだろうか。「マンダラ」や「銀河政体」は「東南アジア」という「地域」を特徴づけるとみなされてはいるが、基本的に国家の中心、コスモロジーに支えられた王権と、その下に（自律性を保ちつつ）服する朝貢国との関係をモデル化した一政体論であり、本稿で検討した隣国との対外交渉のありさまや中国との関係の意味といった広域地域秩序へむかう視野は拓かれられないと思われる<sup>(51)</sup>。本稿の議論を踏まえれば、今後は、「マンダラ」論の射程を自覚的に相対化しつつ、中国からカンボジア、ラーオ諸王国、マレー諸国に至るまで、対外・対内関係を通底して使われた歴史的概念、史料用語である「バンナーカン bannakan」という関係性と、「国書」や「金の板」など文書の運用に着目しつつ、広域地域の「対外関係」を検討する枠組みと視座を再構築していく必要があるのではないだろうか<sup>(52)</sup>。

1 The National Library of Thailand (NL と略記), *chotmai het* (CMH と略記), *ratchakan thi sam* (R.III.) と略記, 小暦 (C.S. と略記) 1200, No.88. なお, *Ho* は館, 堂, 塔, 間, *Luang* は「王の」の意。

- 2 直訳すれば「王の書」であるが、本稿では便宜的により一般的用語として使われる「国書」とする。
- 3 例えば Sarasin [1977], Cushman [1993], Suebsaeng [1971] を参照。
- 4 例えば増田 [1995] を参照。また川口 [2006] は、ラタナコーシン朝初期の文書処理システムを詳細に検討するが、関心の向かうところは王権と官僚との関係を軸とする内政制度である。
- 5 例えば Breazeale [2002], Breazeale and Snit [1988], Chandler [1973], Eiland [1989], Gesick [1976], Kobkua [1988], 黒田 [1991], Mayoury and Pheuiphanh [1998], Puangthong [1995], Sarassawadee [2005], 嶋尾 [2001], 鈴木 [1975], 鈴木 [1981], 竹田 [1975], Wyatt [1994] などを参照。Wilson [1993] が、予備的考察ながらも、中国からマレー・ラーオ諸国まで朝貢関係を包括的に扱い、検討を試みる。
- 6 小泉 [2006a] を参照。
- 7 以下 NL. CMH. R.III. 1200. No.88 に依拠する。
- 8 Ong Lepo は「礼部」か。その他、チャオプラヤー・プラ克蘭が（広東）総督・巡撫に宛てた文書も一通混じる。
- 9 いずれもシャムに服する以前の1770年代前半の文書。
- 10 「タンキア王」は *chao phranakhon tangkia*. NL. CMH. R.I. C.S. 1156. No.2. シャムに阮福暎を捕らえるよう要請したが、シャムは同じベトナム軍同士の問題だとしてこれを拒否した。
- 11 NL. CMH. R.I. C.S. 1158. No.3. なお、ベトナム国王は、「ユアン王」(*chao muang yuan*) や、「ウィアットナム [ベトナム] 国王」(*phrachao krung wiatnam*) 「アンナン国王」(*chao anamkok*) とも表現される [eg. NL. CMH. R.I. C.S. 1158. No.3; NL. CMH. R.I. C.S. 1166. No.5; NL. CMH. R.I. C.S. 1164. No.3]. なお、“yuan”, “wiatnam” の意味と用法に関しては、Flood による注釈も参照されたい [Thiphakorawong 1990: Vol.2, 45-46].
- 12 NL. CMH. R.I. C.S. 1164. No.3. 前宮とともに2人のシャム国王と表現される。
- 13 NL. CMH. R.I. C.S. 1164. No.3.
- 14 広南か。
- 15 NL. CMH. R.I. C.S. 1164. No.3.
- 16 NL. CMH. R.I. C.S. 1166. No.5.
- 17 NL. CMH. R.I. C.S. 1166. No.2. チャイヤー、ナコーンシータンマラート、ソングラー、タラーン、タクアトゥン、クダー、パッタニーの軍では、戦力不十分との認識が示される。



- 18 NL. CMH. R.I. C.S. 1166. No.2.
- 19 NL. CMH. R.I. C.S. 1167. No.2; NL. CMH. R.I. C.S. 1168. No.2; NL. CMH. R.I. C.S. 1168. No.4.
- 20 以下、1809年に交わされた「国書」については、NL. CMH.R.I. C.S.1171. No.1に依拠する。
- 21 NL. CMH. R.I. C.S. 1171. No.1.
- 22 NL. CMH.R.II. C.S. 1175. No.23; NL. CMH.R.II. C.S. 1179. No.18.
- 23 Gesick [1976:143-145], 増田 [1995:29-31]。ただし、ベトナムは中国に金葉表文を送っていないことから、この差異化の由来が対中国関係と無縁であるとは断定できないであろう。
- 24 Thiphakorawong [1996:5].
- 25 NL. CMH. R.I. C.S.1156. No.2.
- 26 NL. CMH. R.I. C.S.1166. No.5.
- 27 NL. CMH. R.I. C.S.1166. No.2.
- 28 NL. CMH. R.III.C.S. 1200. No.88; NL. CMH. R.I. C.S. 1153. No.6.
- 29 Gesick [1976: 134-141] が、これらの往来文書を丁寧に読み解き一世王期の対ビルマ関係を記述するが、本稿の関心からみれば、地方権力間で交換された文書をビルマ=バンコク間交換文書として扱う点は再考の余地がある。
- 30 NL. CMH.R.I. C.S.1147. No.2; NL. CMH.R.I. C.S.1155: No.1, No1 khokhai; NL. CMH.R.I. C.S.1155. No.5を参照。
- 31 NL. CMH. R.I.C.S. 1156: No. 6, No. 8, No.10.
- 32 NL. CMH. R.I. C.S. 1157: No.2, No.5.
- 33 NL. CMH. R.I. C.S. 1158. No.2; NL. CMH. R.I. C.S. 1159. No.2 kokai.
- 34 NL. CMH. R.I. C.S. 1159. No. 2 kokai.
- 35 NL. CMH. R.I. C.S. 1155. No.4. 文書のタイトルには「国書」と記されるが、マイクロフィルム版からプリントアウトした手元のコピーは、発信人の部分が判読困難で、通常末尾に表記される「国書」という言葉は読みとれない。
- 36 鈴木 [1981:12-14]。また Sun Laichen 氏より、Sylvie Pasquet 氏による論考があるとのこと教示を得た。その論考は改訂中で、近く中国語で公刊される予定とのことである [2008年6月26日付 Pasquet 氏からの私信]。
- 37 NL. CMH. R.I. C.S. 1155. No.1 khokhwai. なお、この文書に限らず、タイ語では「ビルマ」は一貫して「アヴァ」(Angwa) と表記される。
- 38 NL. CMH. R.I. C.S. 1156. No.3.

- 39 NL. CMH. R.I. C.S. 1159. No.2. シャムが交易のために仕立てたジャンク船を、イギリスの助力を得て捕獲する可能性も示唆される。
- 40 NL. CMH. R.I. C.S. 1165. No.1.
- 41 以下、NL. CMH. R.I. C.S.1170. No.1に依拠する。
- 42 交渉の経緯には不明な点が残るように思われるが、Sarasawadee [2005:156-157]によれば、セーンウィーがチェンマイに服属を希望して使節を準備したところ、ビルマ軍に遭遇し、一計を案じて、これがチェンマイからビルマへの使節であると偽って窮地を逃れようとした。ところがチェンマイがこの件を知らなかったことが判明したため、ビルマはさらに策略をめぐらせ、チェンマイとバンコクとの間の不信を煽るべく、チェンマイが服属を求めて使節を送ってきたが、ビルマは、バンコクとの友好を重んじてこれを拒否したということにして、使節をカーンチャナブリー、ラーチャブリー経由で送り返したという。“Chotmai het ruang phama cheracha khwammuang nai rawang thai kap phama” [1964:296-301] におけるダムロンの解説、Gesick [1976: 139-141] も参照。
- 43 例えば Kong chotmai het haeng chat [1978:45-52], および NL. CMH.R.I. C.S. 1157. No.7. なお下記 URL においてシャムから送られた金葉表文の画像を閲覧できる。ご教示くださった Sun Laichen 氏に感謝の意を表す。[http://w.886.cn/5u\\_m/61669252/61669252\\_53687.jpg](http://w.886.cn/5u_m/61669252/61669252_53687.jpg); <http://www.npm.gov.tw/exh96/treasure/large/j05.htm>
- 44 金葉表文以外の国書も、それぞれに規定の捺印がなされ、絹布などに幾重にも包まれて準備される。NL. CMH. R.I. C.S. 1157. No.7.
- 45 「藩屬表章票擬式様」を参照。
- 46 The National Archives, the U.K.: FO.69/9.
- 47 Khana kammakan [1971] に収録される叙任文書を参照。ただし、必ずしもすべてが「プラテーサラート」と表現されていないことに留意したい。ヴィエンチャンの例は12-14頁。
- 48 中国に送られた国書の起草と発送については増田 [1995: 27-31] を参照。
- 49 この問題は、「金の板」の意味ともかかわるだろう。他方、シャムとシャムの「朝貢国」（プラテーサラート）との関係のみてみれば、確かに19世紀半ば、「朝貢国」は定期的にシャム国王に使節と金樹・銀樹を献上することが義務づけられ [NL. CMH. R.IV. C.S. 1228. No.224, No.225; NL. CMH. R.IV. C.S.1230. No.102; cf. Sarassawadee 2005: 152], 中国に対する朝貢との相似性を想起させて興味深い。しかし、両者の連関については、より慎重に検討すべきであろう。例えばダムロン親

王は、「古来シャム国の統治制度」と題された講演において、地方統治制度にも言及し、三印法典中「兵部ならびに地方官位階法」および「王室典範」(kotmonthianban)を典拠として、いわゆる「畿内」にある「王子国」、その外側の「大国」、そしてさらにその外側に、外国と接して言葉の異なる異民族の国で「プラテーサラート」(「朝貢国」)が存在し [Damrong 1973 (1927) : 12-13], プラテーサラートは、その民族の慣習に従って統治されたが、金樹・銀樹、および「朝貢品」(khuang ratchabannakan)を3年に1度、アユタヤー国王に献上する義務を負っていたと説明する。しかしダムロンが典拠とした「王室典範」の当該規定をみれば、ここには「プラテーサラート」という言葉のみあらず、「金樹・銀樹を献上する」とは述べられるが、3年に1度という具体的な規定も示されない。石井 [1999] も参照。

50 云南省历史研究所 [1985], および増田 [2001]。

51 ウォルターズ自身、「マンダラ」を“intra-regional relations”に関する議論であると位置づける [Wolters 1982, 1999: Chapter 2]。他方、タンバイヤーは、ウォルターズに先立ち、タイにおける仏教と王権・政体との関係を分析する一環として、歴史的な政体の特徴を論じ、「マンダラ」を基本的フォーマットとして構成される「銀河政体 galactic polity」を提起した [Tambiah 1976; Tambiah 1977]。「マンダラ」「銀河政体」をめぐっては多数の議論があり [eg. Reynolds 1995; Reynolds 2006; Sunait 1990], その再検討は別稿に譲るが、タンバイヤーが、マンダラ観念から「銀河政体」を造語したと述べるように、私見では、「マンダラ」も「銀河政体」も、史料中に現われる用語に依拠しながら抽象化された歴史モデルというよりは、地勢的配置をイメージとして捉えた比喩的ともいべき表現であったと思われる [Tambiah 1976: 70-71, 102]。またこれらの議論において、中国の専ら交易の利の源として、中国人は商人として位置づけられる [eg. Wolters 1999: 32, 34, 132]。このような立論の特徴は、中国と東南アジアを分割し、中国人をもっぱら華僑問題として議論した地域研究としての東南アジア研究の展開と無縁ではなかったのではないかという印象を抱かせるが [小泉 2006b], 研究史、学術史上の問題も含めて、今後の検討課題としたい。

52 筆者はかつて、国王モンクットによる中国への進貢に関する布告を検討し、周辺「朝貢国」との関係もまた、“bannakan”という言葉で表現され、いわゆる中国との「朝貢」と地続きで表現されていることを指摘した [小泉 2006a]。

引用・参考文献

未公刊公文書資料

The National Library, Thailand:

*Chotmai het Ratchakan thi 1, thi 2, thi 3, and thi 4.* (それぞれ CMH. R.I., CMH. R.II., CMH. R.III., CMH. R.IV. と略記の上, 小暦年とカタログ番号を C.S. と No. で表した)

The National Archives, the United Kingdom:

FO 69: Foreign Office, Political and Other Departments: General Correspondence before 1906, Siam.

その他の文献

Aroonrut Wichienkeeo [Arunrat Wichiankhieo] 1977. “Kanwikhro sangkhom Chiangmai samai rattanakosin ton ton tam tonchabap bailan nai phaknua” (Chiangmai society in the early Bangkok period: an analysis based on northern Thailand palm leaf manuscripts). M.A. thesis, Chulalongkorn University.

Breazeale, Kennon. 2002. “The Lao – Tay-son Alliance, 1792 and 1793.” Mayoury Ngaosrivathana and Kennon Breazeale ed. *Breaking New Ground in Lao History: Essays on the Seventeenth to Twentieth Centuries*. Chiang Mai: Silkworm Books: 261-280.

Breazeale, Kennon and Snit Smuckarn. 1988. *A Culture in Search of Survival: The Phuan of Thailand and Laos*. New Haven: Yale University Southeast Asia Studies.

- Chandler, David Porter. 1973. "Cambodia before the French: Politics in a Tributary Kingdom, 1794-1848." Ph.D. dissertation, University of Michigan.
- . 1983. *A History of Cambodia*. Boulder: Westview Press.
- Chotmai het ratchakan thi 2 cho.so. 1171-1173*. 1970. Bangkok: Munlanithi phraborommarachanuson phrabat somdet phra phutthaloetla naphalai nai phraborommarachupatham.
- Chotmai het ratchakan thi 2 cho.so. 1173*. 1970. Bangkok: Munlanithi phraborommarachanuson phrabat somdet phra phutthaloetla naphalai nai phraborommarachupatham
- Chotmai het ratchakan thi 3*. 1987. 5 Vols. Bangkok: Krom sinlapakon.
- "Chotmai het ruang phama cheracha khwammuang nai rawang thai kap phama." 1964. *Prachum phongsawadan phak thi 21, lem 13*. Bangkok: Khurusapha: 243-353.
- Cushman, Jennifer Wayne. 1993. *Fields from the Sea: Chinese Junk Trade with Siam during the Late Eighteenth and Early Nineteenth Centuries*. Ithaca: Cornell University Press.
- Damrong Rachanuphap, *Somdet Kromphraya*. 1973 (1927). "Laksana kanpokkhong prathet sayam tae boran." *Nangsu an prakop phunthan arayatham thai: ton phunthan thang prawattisat sangkhom lae kanmuang*. Bangkok : Thammasat University Press: 1-29.
- Day, Tony and Craig J. Reynolds. 2000. "Cosmologies, Truth Regimes, and the State in Southeast Asia." *Modern Asian Studies*. Vol.34, No.1: 1-55.
- Eiland, Michael Dent. 1989. "Dragon and Elephant: Relations between Viet Nam and Siam, 1782-1847." Ph. D. dissertation, George Washington University.

- Gesick, Lorraine Marie. 1976. "Kingship and Political Integration in Traditional Siam, 1767-1824." Ph.D. dissertation, Cornell University.  
「藩屬表章票擬式様」故宮博物院文献館編『文献叢編』26年第6輯。
- Heine-Geldern, Robert. 1942. "Conceptions of State and Kingship in Southeast Asia." *The Far Eastern Quarterly*. Vol.2. : 15-30.
- 飯島明子. 2000. 「シャムの『インターナショナル・コート』」『歴史評論』No.604: 58-77.
- 石井米雄. 1999. 「アユタヤ王朝の統治範囲を示す『三印法典』中の三テキスト」『タイ近世史研究序説』岩波書店: 127-165. (初出は『東南アジア研究』6巻2号, 1968年).
- 川口洋史. 2006. 「ラタナコーシン朝前期における文書処理システム—クロム・マハータイ (民部省) を事例として」『史林』第89巻, 第6号: 851-892.
- Khana kammakan chatphim ekkasan thang prawattisat, Samnak nayok-ratthamontri. 1971. *Ruang song tang chaoprathetsarat krung rattanakosin, ratchakan thi 1*. Bangkok: Khana kammakan chatphim ekkasan thang prawattisat.
- Kobkua Suwannathat-Pian. 1988. *Thai-Malay Relations: Traditional Intra-regional Relations from the Seventeenth to the Early Twentieth Centuries*. Singapore ; New York: Oxford University Press.
- 小泉順子. 2006a. 「『朝貢』と『条約』のあいだ」『歴史叙述とナショナリズム——タイ近代史批判序説』東京大学出版会: 161-197.
- . 2006b. 「タイ中国人社会研究の歴史性と地域性——冷戦期アメリカにおける華僑・華人研究と地域研究に関する一考察——」『東南アジア研究』43巻4号: 437-466.
- Kong chotmai het haeng chat. 1978. *Samphanthaphap rawang thai-chin*.

Bangkok: Kong chotmai het haeng chat.

*Kotmai Tra Sam Duang*. 1962. 5 Vols. Bangkok: Khurusapha.

黒田景子. 1985. 「華僑地方国ソクラーの成立」『南方文化』12号: 71-92.

———. 1991. 「タラーン港の破壊——ラーマ1世期（1785～1808）シヤムにおけるマレー半島北部西海岸交易港群の役割」『南方文化』18号: 56-81.

Lieberman, Victor. 2003. *Strange Parallels: Southeast Asia in Global Context, c. 800-1830, Volume 1: Integration on the Mainland*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.

増田えりか. 1995. 「ラーマ1世の対清外交」『東南アジア——歴史と文化——』No.24: 25-48.

Masuda, Erika. 2007. "The Fall of Ayutthaya and Siam's Disrupted Order of Tribute to China (1767-1782)." *Taiwan Journal of Southeast Asian Studies*. Vol.4, No.2: 75-128.

Mayoury Ngaosyvathn and Pheuiphanh Ngaosyvathn. 1998. *Paths to Conflagration: Fifty Years of Diplomacy and Warfare in Laos, Thailand, and Vietnam, 1778-1828*. Ithaca : Southeast Asia Program Publications, Cornell University.

桃木至朗. 1996. 『歴史世界としての東南アジア』世界史リブレット12. 山川出版社.

白詩薇 (Sylvie Pasquet). 2005. 「贈送給乾隆母親的緬甸大象——國立故宮博物院現藏『緬甸國銀表』的研究」國立故宮博物院主辦, 文獻足徵——第二屆清代檔案國際學術研討會~「清代檔案與亞洲區域研究」(11月3-5日).

Pearn, B.R. 1964. "The Burmese Embassy to Vietnam 1823-1824." *Journal of the Burma Research Society*. Vol.47, No.1: 149-172.

- Phraratchalanchakon*. 1995. Bangkok : Samnak lekhatikan khana ratthamontri.
- Puangthong Rungswasdisab. 1995. "War and Trade: Siamese Interventions in Cambodia, 1767-1851." Ph.D. dissertation, University of Wollongong.
- Ratanaporn Sethakul. 1989. "Political, Social, and Economic Changes in the Northern States of Thailand Resulting from the Chiang Mai Treaties of 1874 and 1883." Ph.D. dissertation, Northern Illinois University.
- Reid, Anthony. 1988,1993. *Southeast Asia in the Age of Commerce, 1450-1680*. New Haven : Yale University Press. 2 Vols. (Vol.1 1988; Vol.2 1993.)
- Renard, Ronald. D. 1987. "The Delineation of the Kayah States Frontiers with Thailand: 1809-1894." *Journal of Southeast Asian Studies*. Vol.18, No.1: 81-92.
- Reynolds, Craig J. 1995. "A New Look at Old Southeast Asia" *The Journal of Asian Studies*. Vol.54, No.2: 419-446.
- . 2006. "Paradigms of the Premodern State." *Seditious Histories: Contesting Thai and Southeast Asian Pasts*. Seattle: University of Washington Press.
- Sarasin Viraphol. 1977. *Tribute and Profit: Sino-Siamese Trade, 1652-1853*. Cambridge: Council on East Asian Studies, Harvard University.
- Sarassawadee Ongsakul. 2005. *History of Lanna*. Translated by Chitraporn Tanratanakul. Chiang Mai: Silkworm Books.
- Saxena, Sri Krishna. 1951. "Causes Leading to the Deputation of a Burmese Political Mission to the Court of Cochin-China (1822-1824) and its Results." *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient*. Vol.45, No.2: 573-579.



- 嶋尾稔. 2001. 「タイソン朝の成立」桜井由躬雄責任編集 『岩波講座東南アジア史第4巻 東南アジア近世国家群の展開』岩波書店：287-312.
- Stuart-Fox, Martin. 1998. *The Lao Kingdom of Lan Xang: Rise and Decline*. Bangkok: White Lotus.
- Suebsaeng Promboon. 1971. "Sino-Siamese Tributary Relations, 1282-1853." Ph.D. dissertation, University of Wisconsin.
- Sunait Chutintaranond. 1990. " 'Mandala,' 'Segmentary State' and Politics of Centralization in Medieval Ayudhya." *Journal of the Siam Society*. Vol.78, Part 1: 89-100.
- 鈴木中正. 1975. 「黎朝後期の清との関係（1682－1804年）」山本達郎編『ベトナム中国関係史——曲氏の抬頭から清仏戦争まで』山川出版社：405-492.
- . 1981. 「清・ビルマ関係——戦争と和平：1766～1790——」『東南アジア 歴史と文化』10：3-16.
- 竹田龍児. 1975. 「阮朝初期の清との関係（1802－1870年）」山本達郎編『ベトナム中国関係史——曲氏の抬頭から清仏戦争まで』山川出版社：492-550.
- Tambiah, Stanley J. 1976. *World Conqueror and World Renouncer: A Study of Religion and Polity in Thailand against a Historical Background*. New York: Cambridge University Press.
- . 1977. "The Galactic Polity: The Structure of Traditional Kingdoms in Southeast Asia." *Annals of the New York Academy of Sciences*. No.293 (July): 69-97.
- Tej Bunnag. 1977. *The Provincial Administration of Siam 1892-1915: The Ministry of the Interior under Prince Damrong Rajanubhab*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.

- Thiphakorawong, *Chaophraya*. 1996. *Phraratcha phongsawadan krung rattanakosin ratchakan thi 1 chabap Chaophraya Thiphakorawong: chabap tua khian*. Bangkok: Amarin.
- . *The Dynastic Chronicles, Bangkok Era, the First Reign, B.E. 2325-2352 (A.D. 1782-1809)*. Translated and Edited by Thadeus and Chadin Flood; Annotations and Commentary by Chadin Flood. 2 Vols. (Vol.1: 1978; and Vol.2: 1990). Tokyo: The Centre for East Asian Cultural Studies.
- Thongchai Winichakul. 1994. *Siam Mapped: A History of the Geo-body of a Nation*. Honolulu : University of Hawaii Press.
- Tran Van Quy. 2002. “The Quy Hop Archive: Vietnamese-Lao Relations Reflected in Border-Post Documents Dating from 1619 to 1880.” Mayoury Ngaosrivathana and Kennon Breazeale ed. *Breaking New Ground in Lao History: Essays on the Seventeenth to Twentieth Centuries*. Chiang Mai: Silkworm Books: 239-259.
- 吉開将人. 2007. 「『南越国長』 阮福映——清代檔案から見た阮福映の冊封問題」『史朋』40号 : 59-77.
- 云南省历史研究所編. 1985. 『《清实录》越南緬甸泰国老挝史料摘抄』昆明 : 云南人民出版社.
- Vella, Walter F. 1957. *Siam under Rama III, 1824-1851*. N. Y.: Published for the Association for Asian Studies by J. J. Augustin.
- Wilson, Constance M. 1970. “State and Society in the Reign of Mongkut, 1851-1868: Thailand on the Eve of Modernization.” Ph.D. dissertation, Cornell University.
- . 1993. “Tribute and Gift Exchanges in the Pre-Modern Thai Political System: The Early Bangkok Period, 1781-1874.” Paper Presented at

the Fifth International Conference on Thai Studies, SOAS, London.

Wolters, O.W. 1982. *History, Culture, and Region in Southeast Asian Perspectives*. Singapore : Institute of Southeast Asian Studies.

———. 1999. *History, Culture, and Region in Southeast Asian Perspectives*. Revised edition. Ithaca: Southeast Asia Program Publications, Cornell University.

Wyatt, David K. 1984. *Thailand : A Short History*. New Haven: Yale University Press.

———. 1994. "Siam and Laos 1767-1827." *Studies in Thai History*. Chiang Mai: Silkworm Books: 185-209 (初出は *Journal of Southeast Asian History*. Vol.4, No.2, 1963年).